

様々な音の風景

X IV

～20世紀以降の音楽とその潮流～

2017年10月26日（木）18:45開演（18:15開場）

すみだトリフォニーホール（小ホール）

チラシでご案内をいたしました、第3曲目 中島洋一作曲：「青い詩」オンドマルトノとピアノの
ためには、楽器設置の都合により第1曲目で演奏いたします

様々な音の風景 X IV

～20世紀以降の音楽とその潮流～

PROGRAMME

- 1 中島洋一：「青い詩」オンドマルトノとピアノのために
Youichi NAKAJIMA: "BluePoem" ~for Ondes Martenot and Piano
久保智美 (o.m.) Tomomi KUBO / 神田麻衣 (pf) Mai KANDA
- 2 ヒンデミット：ヴァイオリンソロソナタ
Paul HINDEMITH: Sonate fur Violine
北川靖子(vn) Kiyoko KITAGAWA
- 3 北條直彦：「ピアノのための響相」～記憶の風景より～ “プレリュード”
Naohiko HOUJO: Prelude from "Kyoso for Piano" ~from Landscape in Remembrance
「ピアノのための三つの小品」より「小さな絵から」
“from Small Picture” ~from Three Short Pieces for Piano
パースペクティブ＝ピアノのための～ “Perspective for Piano”
古川五巳 (pf) Izumi FURUKAWA
- 4 浅香満：“Songs for Saxphone and Piano”
Mitsuru ASAKA “Songs for Saxphone and Piano”
中村有里 (sax) Yuri NAKAMURA / 山本有紗 (pf) Arisa YAMAMOTO
- 休憩 -----
- 5 北條直彦：「弦楽三重奏曲」～記憶の風景より～その2
Naohiko HOUJO: "String Trio" from Landscape in Remembrance part2
惠藤久美子 (vn) / 百武由紀 (va) / 安田謙一郎 (vc)
Kumiko ETOH Yuki HYAKUTAKE Kenichiro YASUDA
- 6 助川敏弥：「桜まじ」 / ジスモンダ
Toshiya SUKEGAWA: "Spring wind" (2003) / Gismonda (2010～2011)
深沢亮子 (pf) Ryouko FUKASAWA
- 7 中嶋恒雄：「狩野敏也の詩による三つの歌曲」
Tuneo NAKAJIMA: 3 Songs~Poem by Toshiya Kanoh
中嶋啓子(sop) Keiko NAKAJIMA 安田正昭 (pf) Masaaki YASUDA
8. アンリ・デュティユ：「ピアノソナタ」から第三楽章
Henri DUTILLUX: The 3rd Movement from Sonate pour Piano(Choral et Variations
北川暁子 (pf) Akiko KITAGAWA

※チラシでご案内をいたしました、第3曲目 中島洋一作曲：「青い詩」オンドマルトノとピアノのために は、楽器設置の都合により第1曲目で演奏いたします。

の世界が混在する。幻想絵画に習った幻想音楽の世界に属する。2011年12月10日、津田ホールにて深沢亮子により初演。(助川敏弥の解説文より抜粋)

～～演奏にあたって (深沢亮子)

10月26日、20世紀以降の音楽とその潮流～様々な音の風景XIV～で久しぶりに参加させて頂く事になり、皆様とのおめもじを楽しみに致しております。助川敏弥さんの作品は、私が30歳の頃よりお願いし、一昨年ご逝去なさるまでずっと弾かせて頂いておりました。最初の「タペストリー」や「ピアノのための作品No1-No10」は大曲、そして難曲で、30-40分もかかる作品でした。その後ある時、助川さんが「もう大声を張り上げなくても、静かに人と話をした方がお互い通じ易いことに気がついたので、これからはそうしようと思う」とおっしゃいました。それから徐々に作風も変っていらした様に感じます。「桜まじ」と「夜のうた」は2002年の作品で12月16日日本音楽舞踊会議主催の「ピアノとヴァイオリンとチェロのタペ」(数年前からこのコンサートのタイトルが深沢亮子と室内楽の仲間たちに変わりましたが)で初演させて頂きました。今回は「桜まじ」の他2010-11年にかけて作られた。「ジスモンダ」の初演は2011年12月に深沢亮子が津田ホール、麦の会チャリティーコンサートで行いました。

チェコ出身の画家A.ミューシャの同名の絵画から触発されて書かれた作品で幻想的、何か不思議な雰囲気を持った曲です。作曲者作品解説では無調の世界と調性三和音の世界が混在すると書かれており、最後はコラールで終わります。「ジスモンダ」はミューシャのバリ無名時代に名女優サラ・ベルナールからの依頼により演劇「ジスモンダ」のポスターを描き一躍有名になり、その後も彼女のための作品が次々と生まれたそうです。



● 深沢 亮子 (ふかさわ りょうこ・ピアノ)

15歳で第22回日本音楽コンクール首位受賞後ウィーン国立音楽大学へ留学し、1959年首席で卒業。1961年ジュネーヴ国際音楽コンクール1位なしの2位。以来、学友協会黄金の間やコンチェルトハウス他で度々オーケストラとの協演を始め、日本、ヨーロッパ、南米、アジアの諸国で精力的に演奏活動を行い、日本の作品も数多く紹介している。また、国際音楽コンクールや日本音楽コンクール他の審査員を務める傍らラジオ、TVの出演、CD、著作、楽譜の出版等々も多い。日本音楽舞踊会議代表理事。

* * * * *

7. 中嶋恒雄:「狩野敏也の詩による三つの歌曲」

Tuneo NAKAJIMA: 3Songs~Poem by Toshiya KANNO

中嶋啓子(sop) Keiko NAKAJIMA 安田正昭(pf) Masaaki YASUDA

～～作品について(中嶋恒雄)

この曲は、1997年に初演した「そこに人がいるから」に改訂を加えて第1曲とし、また、1996年初演の「ここを過ぎて泣け」を第3曲に置き、新たに今回作曲した「風に吹かれて」を第2曲として、3曲セットの歌曲に作り変えたものである。作曲家にとって詩は、何か心に訴えるものを感じさせてくれないと、とても曲にする事はできないが私にとって狩野

さんの詩は、始めて出会ったときから、引きつけられるものがあった。

狩野さんは、ピカソの「芸術とは、真実を悟らせるための嘘である」とワイルドの「拙劣な詩は、すべて本当の感情から生まれる」を眼目として、詩作をするが、このワイルドの「拙劣」という言葉は、詩とは形であるとする一般通念からの比喩であり、音数律をもたない今日の自由詩を指すことは、述べるまでもない。狩野さん自身、「これって詩集なんですか」と女流詩人に言われたことさえあると告白しておられるように、実際に狩野さんの詩を曲にする困難さは、物語のように長い散文体にある。ちなみに、3曲目の「ここを過ぎて泣け」の全文を掲げよう。

「生きものは、みんな友だち/ここを過ぎて泣け」/インドの北の砂漠の石の門に/刻まれた言葉/ああ、ここを過ぎて泣けと/インドの友は、虫けらひとつ殺さない/やさしく振り払うだけだ/次の世に、虫になるかも知れないと/本気で思っているのだ/後生を良くするために/無駄な殺生をしないと決めている/そんなにやさしいインドの友でさえ/ほかの生きものを殺めなければ/生きていけなかったと嘆いて泣く/生まれ変わったらもっと金持ちになる/来世も君と一緒にいる/女に生まれ変わる、男に生まれ変わる/いったい何を、ほざいているのか/いったい何を、たわけているのか/霊長目ヒト科ヒト属ヒト/きみには、ふたたびヒトに生まれ変わる資格はない/ふたたびヒトに生まれ変わる望みもない/ヒトはおろかケモノも無理で/トリもサカナも高望み/虫ケラになるのが、せい一杯というものさ/無用に生きものを殺め続けたきみは/輪廻の輪の一番後ろについて/後生を積んだヒトのあとに/小さくなって並ぶのだ/ひとごとと思っはいけない/そこにいる、きみのことだ/きみとは、ぼくのことだ/嘆いても間に合わない、きみの罪/嘆いても詮方のない、きみの罪/ここを過ぎて、思っきり泣くがよい/ああ、ここを過ぎて、ここを過ぎて泣け」

この詩を、どのように歌曲化したか。聴いてみてのお楽しみということだろう。狩野さんは、多くの作曲家が彼の詩を歌曲にしてくれたが、中嶋さんののが、自分には一番ぴったりすると、いつか手紙で私に書いてくれた。この曲は、この狩野さんの言葉への返礼でもある。最後に第2曲の詩も、本来は長文であるが、これもただ、1行に込められた狩野さんの思いだけで、曲を構成したことを、述べて置こう。

〔プロフィール〕

●中嶋恒雄（なかじま つねお・作曲）



東京芸術大学音楽学部作曲科卒業、及び同大学楽理科を経て指揮科卒業。1984年カリフォルニア大学サンディエゴ校研究員。上野学園大学、東京学芸大学講師、及び北海道教育大学札幌校、旭川校、釧路校、宮城教育大学、宇都宮大学、静岡大学、信州大学、滋賀大学、岡山大学、金沢大学、愛媛大学、琉球大学、山梨大学大学院の講師を勤めた。現在山梨大学名誉教授、財団法人音楽文化創造参与。

著書「音楽教育研究のまとめ方」訳書「ジャズの歴史」他、多くの論文、作品がある。作品は、チェコの作曲家によって、Neo-impressionismと評価されている。



●中嶋啓子（なかじま けいこ・ソプラノ）

山梨大学音楽科卒業。片野坂栄子氏に師事。ミラノ音楽院に留学しカルラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで発声法を研究。1996年以降、中嶋恒雄歌曲作品のすべてを初演する。2012年、チェコ共和国クロムニエジーシュFestival Forfestに招かれて中嶋恒雄の歌曲を演奏し、好評を博した。



●安田正昭（やすだ まさあき・ピアノ）

1984年マリアカラス国際コン・ピアノジュニア部門優勝。1986年東京芸術大学1年次にマントヴァ・フェスティバルに招かれ、R.ロッシ賞受賞。1989年第1回パリ・スタインウェイ・ピアノコン優勝。1990年仏国際コンクール、ピアノ部門優勝。モーツァルト特別賞、メシアン特別賞受賞。パリ国立高等音楽院ピアノ、伴奏、室内楽科を卒業。イヴォンヌ・ロリオ、ミシェル・ヴェロフ等に師事。現在上野学園大学準教授。

* * * * *

8. アンリ・デュティユ：「ピアノソナタ」から第三楽章

Henri DUTILLEUX :

The 3rd Movement from Sonate pour Piano(Choral et Variations

北川曉子 (pf) Akiko KITAGAWA

～～作品について(高橋健介氏の解説文を引用)

アンリ・デュティユ（1919～2013）は、20世紀後半に活躍したフランスの代表的作曲家。1933年からパリ音楽院で学び、1938年にはフランスの作曲家の登竜門であるローマ賞を受賞した。デュティユは1946年ピアニストのジュヌヴィエーブ・ジョワ（1919～2009）と結婚するが、このソナタは翌47年に彼女のために書かれ、初演も48年にジョワによって行われた。この作品が作曲者自身が「作品1」を付けたことから、自らの作風を確立した重要な作品と言える。第3楽章は単独で演奏される事も多く、コラールと多様性に富んだ四つの変奏で構成された一つの連続した楽想である。作曲者がこの作品の作曲時に「典型的なフランスの技法から逃れた」と述べたように、近代フランス音楽の伝統を受け継ぎつつも独自の路線を切り開いたデュティユの色彩感に溢れている。



●北川曉子（きたがわ あきこ／ピアノ）

丸山淑子女史、L. コハンスキー教授に師事。1964年イイノホールで第1回リサイタル。1967年武蔵野音楽大学卒業。同年オーストリア国立アカデミー入学。R. ハウザー教授に師事。1969年アカデミーを全教授一致最優秀で卒業。ベーゼンドルファーコンクール優勝。1970年ミュンヘン国際コンクール2位。1984年演奏活動20周年にベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会（10日間7夜）。東京藝術大学名誉教授。日本音楽舞踊会議理事長。

中嶋恒雄

この曲は、1997年に初演した「そこに人がいるから」に改訂を加えて第1曲とし、また、1996年初演の「ここを過ぎて泣け」を第3曲に置き、新たに今回作曲した「風に吹かれて」を第2曲として、3曲セットの歌曲に作り変えたものである。作曲家にとって詩は、何か心に訴えるものを感じさせてくれなければ、とても曲にすることはできないが、私にとって狩野さんの詩は、始めて出会ったそのときから、引きつけられるものがあった。狩野さんは、ピカソの「芸術とは、真実を悟らせるための嘘である」とワイルドの「拙劣な詩は、すべて本当の感情から生まれる」を眼目として、詩作をするが、このワイルドの「拙劣」という言葉は、詩とは形であるとする一般通念からの比喩であり、音数律をもたない今日の自由詩を指すことは、述べるまでもない。狩野さん自身、「これって詩集なんですか」とある女流詩人に言われたことさえあると告白しておられるように、実際に狩野さんの詩を曲にする困難さは、物語のように長い散文体にある。これらの詩を、どのように歌曲化したかは、聴いてみてのお楽しみということだろう。狩野さんは、多くの作曲家が彼の詩を歌曲にしてくれたが、中嶋さんのが、自分には一番ぴたりすると、いつか手紙で私に書いてくれた。この曲は、この狩野さんの言葉への返礼でもある。第2曲の詩も、本来は長文であるが、これはただ、1行に込められた狩野さんの思いだけで、曲を構成したことを、述べて置こう。

そこに人がいるから

狩野 敏也 詩

そこに人がいるから バスが来る
そこにバスが来るから 人がいる

なんにもないバス停

目印もない、ダイヤもない
屋根もなければ、時計もない

村のまん中の四辻に

なんとなく、それとなく

人が集まってくる 集まってくる

時計をみながら走ってくる人などいない
時計を持っている人もすくない

バスは、朝と昼と夕暮れに来るらしい
ガイドがうそぶく

みんな、ここにバスが来ること知っている
みんながいるころ来ればよいと、知っている

なんにもいない、みんな知っている

中国のまん中あたり、お寺の聖地
山西省、五台山の近くの村里

ここでは、時が、ゆったりと流れる
人びとも、ゆったりと歩く

そして、のんびりと待つ

バスは来るのか、来ないのか

いったいいつになったら来るのか けれども
みんなゆったり歩いて集まってくる

なんにもないバス停に

そして、のんびり待っている

なんにもないバス停に

集まってくる そして待っている
集まってくる そして待っている

風に吹かれて

おれが死んだら 風葬にしてくれ

おれが死んだら いつか話したあの高原の

両側に二つの海に見える草むらに

ただ放り投げておいてくれ

それから例の骨箱をゆっくりと吹いてくれ

すると大勢の鳥たちがやってきて

おれの身をいとおしくついばんでくれる

それから、どこからか花の種をくわえてきて

体から溢れるほどに蒔きつけてくれる

やがておれは、色とりどりの花の骸となるだろう

冬虫夏草も育ててやろう

おきまりの、まんじゅしゃげなども咲かせてやろう

それから それから

風に吹かれ 風に吹かれて

風に曝され 風に曝されて

やがて立派な白い骨になるのだ

人体模型のような

野晒しの骸骨になるのだ

星月夜には 星たちに負けないように

青白く青白く光ってやろう

おれが死んだら風葬にしてくれ

いつか話した、あの高原の

両側に二つの海が見える草むらで

おれの好きな風葬にしてくれ

ここを過ぎて泣け

狩野 敏也 詩

「生きものは、みんな友だち

ここを過ぎて泣け」

インドの北の砂漠の石の門に

刻まれた言葉

ああ、ここを過ぎて泣けと

インドの友は、虫けらひとつ殺さない

やさしく振り払うだけだ

次の世に、虫になるかも知れないと

本気で思っているのだ

後生を良くするために

無駄な殺生をしないと決めている

そんなにやさしいインドの友でさえ
ほかの生きものを殺めなければ
生きていけなかったと嘆いて泣く

生まれ変わったら、もつと金持になる…

来世も君といっしょになる…

女に生まれ変わる…男に生まれ変わる…

いったい、何を、ほざいているのか

いったい、何を、たわけているのか

霊長目ヒト科ヒト属ヒト

きみには、ふたたびヒトに生まれ変わる資格はない

ふたたびヒトに生まれ変わる望みもない

ヒトはおろか、ケモノも無理で

トリもサカナも高望み

ムシケラになるのが、せいっぱいというものさ

無用に生きものを殺めつづけたきみは

輪廻の輪の一番後ろについて

後生を積んだヒトのあとに

小さくなつて並ぶのだ

ひとごとと思つてはいけない

そこにいる、きみのことだ

きみとは、ほくのことだ

海いても、間に合わない、きみの罪

嘆いても、詮方のない、きみの罪

ここを過ぎて、思いつき泣くがよい

ああ、ここを過ぎて、ここを過ぎて泣け